

JELC NEWS

ジェラ ニュース 第10号 2006年8月15日発行 発行責任者 ローウェル・グリテベック

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援 ・ アジア子ども支援 ・ ブラジル子ども支援 ・ ボランティア派遣 ・ 奨学金制度 ・ 宣教師支援

社会に出ていき 手をさしのべる

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、
旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。」
マタイによる福音書 第25章35～36節



田園調布教会

Denenchofu Lutheran Church



蒲田教会

Kamata Lutheran Church



静岡教会

Shizuoka Lutheran Church



本郷教会

Hongo Lutheran Church



岡山教会

Okayama Lutheran Church



札幌教会

Sapporo Lutheran Church



熊本教会

Kumamoto Lutheran Church



Charity Concerts
JELC
with harpist
Christina Tourin



京都教会

Kyoto Lutheran Church



Kyra Precaria リラ・プレカリア



第3回世界の子ども支援チャリティコンサート 各地で好評を博す

5月19日(金)から28日(日)にかけて全国8つの日本福音ルーテル教会(田園調布、蒲田、札幌、本郷、京都、熊本、岡山、栄光{静岡県藤枝市})で、JELC世界宣教委員会と共催によるハープのチャリティコンサートを開催しました。合計来場者は890名、献金総額は約85万円でした。付属幼稚園のある蒲田教会と田園調布教会では多数の園児が会場に集まり、クリスティーナさんが奏でるハープの音色に聴き入りました。終演後はハープを取り囲んで、興味津々の様子でさわったり弾いたりしている姿が印象的でした。協賛団体数も、従来の13から20へと大幅に増えました。ご協力感谢您いたします。来場者の感想とクリスティーナさんから届いたメッセージを2ページ以下に載せましたので、お楽しみください。

この号にはこんな記事が

チャリティコンサート来場者の声	2~3
ブラジル子ども支援 ブラジルだより(石丸哲平) 調理室改修工事完了(ヘコンシリアサン)	3
ボランティア派遣 インド・ワークキャンプの祝福(デビッド・パーソン) 第3回インド・ワークキャンプ参加者募集!	4
R・グローブズ博士夫妻セミナー参加報告(C・サク)	5
奨学金制度 大学で学べる喜び(クー・エイミー) リラ・プレカリア(折りのたて琴)研修講座開講(中山康子)	6
難民支援 諸外国における難民受け入れ(大原 晋) 講演会のお知らせ「世界の難民・日本の難民」	7
JELA役員/事務局員のご紹介 今後の催しものご案内 支援者一覧	8
編集後記	

Christina Tourin Harp Concert



●今日はなんといい日だったことでしょう。教会で聴くハープは、懐かしくしかも清らかな静寂に包まれていて、最近ざわざわしていた心に染入りました。その上、思いがけずハープにも触れられ、しかもサイン入りのCDまで頂き！ 伺った甲斐があったというもの！！ 実は頭の片隅に退職したら音楽を楽しみたいという思いがチラッとあって、ハープも対象の一つなのです。帰りは乳白色の雲間にオレンジ色の夕日が美しく、一緒に行った友人と、最期までいい一日だったとうなづきあって、別れました。(村澤 圭／静岡・藤枝会場)

●この熊本の地では、なかなかハープという楽器にはお目にかかることが出来ないのですが、今回は、充分に楽しませて頂きました。ハープという楽器も大小あり、それぞれに違った音色を奏で、クリスティーナさんによって、素晴らしい演奏になり、心地よい気持ちになりました。又、ルーテル社団が支援されている、飢えや病気に苦しむ世界の子供達の現状を垣間見ることが出来たことも、大きな収穫でした。(中島千麻子／熊本会場)

●平日の夜のお出かけはちょっと億劫だったのですが、甘く優しいような、物悲しく切ないような、弦の響きにとっても穏やかで静かな時間を過ごすことができ、行ってよかったなあとはんとは感じさせていただいた演奏会でした。

チャリティコンサート 来場者の声



娘二人もハープにとっても興味を示し、すばらしい演奏を静かに聴いていたり(寝ていた??)終わってからは長いこと実物のハープに触れていました。小型のハープを弾きながら、私たちのほうへ移動して来られた時、真近で聴いたハープの音色が本当になんとも言えず私の心に響いてきました。私がこんな風に感じるのだから癒しを求めている方々にはさぞかしすばらしい贈り物だと思います。(那須五恵／熊本会場)

●「エーデルワイス」の英語の言葉をPCプロジェクターに映して皆で歌ってとても盛り上がりました。皆よく知っている曲でしたから年配の人から中・高生の人まで、横を見たらその人も口ずさんでいてとても良かったです。ジャズっぽい曲とかプログラムと違う曲もありましたがそれもとても良かったです。トゥーリンさんがトラップ一家の人たちと演奏していたと言う話もとても良かったです。(山森可奈子／熊本会場)

●私は本郷学生センターで英会話を習っております。偶然にも最近興味を持っておりましたハープのコンサートが催されると伺い、楽しみにしておりました。ハープを生で聴くのは初めてでしたが、クリスティーナさんの奏でる調べはとても優しく、時に幻想的に会場を包みしました。毎日の生活で少々疲れ気味だった私のハートにも染みわたり、心癒されました。このコンサートの目的であるチャリティーに関するスライドをハープの演奏と共に映写するというのは、コンサートの流れの中でとても自然でよかったと思います。多くの言葉より伝わるものがあつたと感じました。(都筑ゆかり／本郷会場)

●クリスティーナ・トゥーリンさんの演奏に接し、深い感銘をうけました。喧騒の現代にあつて、クリスティーナさんのアイリッシュ・ハープのかそけき音色は、はっとするほど繊細で、聴く者の心に寄り添い、心地よく解きほぐしてくれました。ダニー・ボーイなどのスコットランドやケルトの民謡、自作曲、日本の歌を交えたプログラムは、それらのメロディが初めて聴く曲であつてもどこか懐かしく、ハープ・セラピストとしても豊かな経験を積まれたクリスティーナさんの、聴き手に対する深い慈しみとシンパシーに溢れたものでした。(伊藤千穂／本郷会場)

●澄んだ爽やかな音色にすっかり魅せられました。僅か1時間程の演奏でしたが、素晴らしい

演奏にもっと聴きたかったと思ったのは私だけではなかったと思います。私はいまだにLPレコードを愛聴している一人ですが、所蔵のなかにハープ独奏がないので何とか入手したいと思っています。この度の演奏会でオリジナルCD2枚を求めて、楽しみに就寝前に聴いております。(森川利一／札幌会場)

●そのきれいな音色に感動しました。毎日の子育てと家事という繰り返しの現実を忘れ、聞き入りました。クリスティーナ氏の表情はとても優しく、時折、子供達に穏やかに微笑まれ、視覚からも癒しへと導いてくれました。演奏会の後はCDも買って大満足で帰りました。嬉しかったのは、二年生の娘も年中の息子も、一緒に聞いてくれ、「この曲弾いてたよね。」「ハープにさわれたよね。」と本物に触れた喜びを伝えてくれたこと。上の娘は、幸運にもクリスティーナ氏と一緒に弾く事が出来たので、より素晴らしい体験として記憶に残る事でしょう。下の息子は、覚えていないかもしれませんが、将来CDを聴かせながら、「あの時あなたは眠くなって、私のところに抱っこされにきたのよ。それ程、心地いい音色だったのよ。」と話してあげようと思っています。(横山智子／蒲田会場)

●トーリンさんが奏でるハープの、耳に優しい音色は礼拝堂を満たし、また私達一人ひとりの聴衆の心の隅々まで届いた。トゥーリンさんはホスピスの入院患者にハープの音楽を届ける活動もしている。愛する人々にまもなく別れを告げなければならない、絶望の淵にいる人々にたとえ短い時間でも心を慰める音楽を届ける。その音楽を奏でるのにハープほどふさわしい楽器はないと思った。トゥーリンさんが奏でるハープの美しい音色をバックグラウンドミュージックにして映された子供たちの、瞳がきらりと輝いていた可愛らしい笑顔は忘れられない。あの子供たちがどんなに困難な生活を続けているとか。また家が貧しくて学校にさえ行けない子供たちが世界中にはどんなに大勢いるとか。私達は子供も大人も豊かな生活に慣れてしまっていることに今一度気がつかされた。(安藤淑子／蒲田会場)

●5月27日の昼下がりのひととき、クリスティーナさんのハープコンサートが開かれました。クリスティーナさんの指先と弦を通して、まるで天上の音楽のような美しい曲が奏でられ、来会者一同、ゆったりとして癒しのときを過ごしました。演奏の合間に行われたスライド上映では、飢えや病気に苦しむ子どもたちの現状が報告され、一同がJELAの働き、助けを必要としてい



ブラジルだより

8月に職員がブラジルを訪問しますので、次号のニュースレターでは、現地の様子をさらに詳しくお知らせします！

る子どもたちを憶え、心から献金を捧げました。このような会を通して多くの方々が教会、JELAの働きに触れる機会になったことを改めて感じています。岡山教会は新会堂が出来て一年余りです。みんなで「地域に開かれた教会」になれるようにと祈りながら過ごす中、今年のJELAのチャリティーコンサートの会場に岡山教会をお用いくださって、本当にありがとうございました。(松井祐代／岡山会場)

日本の皆さんへ

日本でお世話になったすべての皆さまに感謝しています。すばらしい方々との出会いと美しい思い出を胸に、私は帰国の途につきました。来年もまた日本で、今回とはちがう日本の音楽を奏でることができたら、なんとすばらしいことでしょう。帰国してからは、出版間近の本の仕上げをしたり、イーストコーストで5つの演奏会を開いたりしました。来週は盲学校に行き、目の見えない子どもたちにハーブの弾き方を教えます。目の不自由な人には、ハーブは学びやすい楽器なのです。それからアラスカに3週間滞在し、英国とアイルランドで秋をすごす予定です。表紙の写真は、日本のコンサートツアーのとき、私のカメラで撮ったもののコラージュです。楽しいひとときを思い出していただけるなら幸いです。親愛なる皆さまの毎日が、祝福とあわせに満ちたものであることを願っています。

6月23日

感謝をこめて
クリスティーナ・トゥーリン

Bom dia!

僕は今ブラジルで2回目の冬を経験しています。今年もすでに何回か風邪をひいたものの元気にしています。施設の子どもたちも元気です。先日、総計140人ほどの子どもたちに、PCや僕の手持ちの本や雑誌を使って日本の紹介をしました。ブラジルの子どもたちにとって日本はどこにあるかも分からない未知の国です。

まずは地球儀を使って説明し、次にお金の単位、食べ物、街の様子、ファッション、天災の話と進めるうちに、子どもたちは大きな興味を示し始めました。日本では当たり前ドーム型競技場の様子にも驚いていました。僕の専門のアニメや特撮についても話しました。欧州などで大人気なのは皆さんももうご存知かと思いますが、こちらでも同様に物凄い人気です。子どもたちは本当に明るく朗らかで、最後には皆「Arigatou! Sayonaraaaaa!」と元気に挨拶してくれました。

僕のブラジル滞在も2ヶ月余となりました。帰国直前まで、できるだけ多くの事をブラジルの子どもたちと共有できるよう頑張りたいと思いますので、引き続きお祈りをお願いいたします。詳しい報告は帰国後にいたします。

7月5日

ブラジルボランティア 石丸哲平

調理室改修工事完了!

今日はイースターサンデーです。日本の皆様に復活のイエス様の豊かな祝福をお祈りいたします。さて、JELAから暖かい支援を得て、ヘコンシリアサンの調理室の改修工事が完了しました。今までよりずっと広くなり、働きやすくなりました。新しい湯沸かし器と食洗機のおかげで、すべてが衛生的になりました。食器を下げるカウンターができたおかげで、きれいな食器の脇に汚れた食器が置かれることもなくなりました。調理器具用の新しい棚も入り、なべがきれいに収納できるようになりました。調理を担当する人たちはもちろん、子どもたちやスタッフも皆とても喜んでます。ここに写真を送りますので、どうぞ私たちと共に喜んでください。神様と皆様に心から感謝いたします。

4月16日

ヘコンシリアサン財務担当
Karin Simon





インド・ワークキャンプをとおして得られる祝福と喜び

デビッド・パーソン(市ヶ谷教会)

また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。……更に、イエスは言われた。「神の国は何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」(マルコによる福音書4章26節～27節、30節～32節)

2回目となる今年のインドワークキャンプで私は、自分たちがこれまでにCRHP(医療・健康促進を中心とした、総合地域貢献型プログラムと、それを実施している地域の名称)を訪問したあいだに蒔かれたたくさんの種について考える機会がありました。昨年のキャンプでは、小学生の子どもたちに日本の童謡「ぞうさん」を教えました。今回、同じ子どもたちに会ったとき、その中の一人がこの歌を「日本語」で、ほとんど間違えることなく歌ってくれました。一年も前に、ほんの20分だけ教えた歌を、こんなにはっきり覚えていたなんて! 「ぞうさん」の歌とメロディは、その子に深い印象を与えたに違いありません。彼女の心にどんな種が蒔かれ、それが彼女にどれほど大きな変化をもたらしたことでしょう。彼女の内面は、私たちにはとうてい理解できないほどに拡大されたのではないのでしょうか。日本から来た私たちに会う前には想像もしなかった夢や希望が、彼女のうちにいま溢れているのを感じました。人間的に考えるなら、ほんのささいな、短時間の、とるに足りない出会いでした。しかしそれが、私たちの理解を超えた結果をもたらすことがあるのです。まるで、イエスが話された、もっとも小さい種が、もっとも大きなからし種になるとえのようですね。

神様は不思議な方法で働くお方です。さきほど紹介した子どもの人生は、大きく変えられました。私も自分の中に蒔かれた種によって、彼女と同じように人生を変えられた経験をしましたから、そのことがよくわかります。私はCRHPの人々から新しい生き方、希望、そしてあふれるばかりの喜びをいただきました。CRHPに戻ってきたときはいつも、驚きと喜びが以前にも増して強まります。そして、ここで働く人々と知り合えた祝福と恵みに大きな感謝をおぼえます。私の中に蒔かれた種は、自分では測れないほどの大きな祝福を私自身にもたらしてくれているのです。

私の人生は、ここで会ったラッナマラさんによって変えられました。彼女はわずか16歳か17歳で夫を亡くし、11ヶ月の子どもを失い、エイズにもかかっています。それでも喜びと確信に満ちて、「私には主と共にいる喜びがある!」と笑顔で言います。写真上;ラッナマラさん



私の人生はアロレ博士によっても変えられました。彼は自分が学んだり訓練をつんだこと、つまり医者としての役割をはるかに超えて、神様を信じる信仰によって自分には何でもできる、ということを実践している人物です。彼を目にすると、聖書のこの約束が本当であることがわかります。彼のやっていることは、まさに奇跡です。インドに来て彼の姿と働きに接するとき、私には自分が直面している問題や困難は必ず克服できるのだという信念、確固たる思いがわきあがってきます。

写真下:アロレ博士



私の人生はまた、ショウバ博士、あるいはモーゼスその他のCRHPの職員によっても変えられました。彼らは貧しい人たちを全身全霊で助けようと努力しています。助けられても、何のお返しもできないほど貧しい方たちをです。彼らの働きを見ていていつも感じるのは、ほとんどの場合に私たちは、自分で与えるものよりもずっと大きなものを相手から受け取るということです。私たちが奉仕をするときに、自分の思いをずっと超えて、自分たちこそが奉仕されてきた存在であることを知らされるのです。神様の恵みはこのように素晴らしい形で示されるのです。

神様はまた、不思議な方法で人々の人生を変える方です。キャンプ中に一人の年配いた現地の女性が私に近づいてきて、はちきれんばかりの笑顔で、「ミユキ」と言いました。「ミユキ」というのは、以前にJELAが派遣した野澤美幸さんのことです。彼女はジャムケッドの人々にとても愛されているのです。ジャムケッドで彼女が奉仕したのは何年も前の、ほんの数ヶ月です。そのときの働きが人々の心をこんなに魅了しつづけていることを、おそらく美幸さん自身は知らないでしょう。彼女はジャムケッ

ドでの奉仕をとおして美しい種を蒔き、それがいま、本人が想像も出来ない形で実っているのです。

神様はたしかに不思議な方法で働かれる方です。日本からやってきた私たちを恥ずかしそうに見つめていた、もの静かな少女、彼女も変わりました。自分の母親が、私たちの作った義足をもらった瞬間、この小さな女の子は喜びにあふれて、「ありがとう」を言えたのです。自分の村に帰って、CRHPの義足作りワークキャンプで起こった喜ばしい出来事を人々にふれまわる、この子の姿が目に見えそうです。そう、CRHPの経験は、彼女の人生に大きなインパクトを与えたのです。

以前のキャンプで義足を受け取った一人の少年のことも忘れられません。彼はそのとき15歳ぐらいだったでしょう。事故で足をなくしたということでした。義足を手にした彼は、それをはめて、おそろおそろ歩こうとしました。わずかな微笑みもらし、また歩けるようになったことが信じられない顔をしていました。そして、そのかすかな笑みは、杖なしで再び歩けるのだという事実を完全に理解したとき、顔面いっぱいになり、喜びの光を放ちました。あふれんばかりの喜びを周囲に放射する彼の笑顔。私はそれをけっして忘れることはないでしょう。そしてこの事実が、私の心に種を蒔きました。義足はなんと大きな喜びと希望を人々にもたらすのだろう、という感動にとらえられたのです。私はこの少年が得たのと同じ喜びを、もっと多くの人に与えるために一生懸命がんばります。そのために、義足作りのための献金を広く募ろうと決意しました。

お母さんへの義足のプレゼントに、恥ずかしさを乗り越えて「ありがとう」と言えた少女……義足によって新しい未来と希望を手に入れた少年……、そして、数ヶ月のボランティア奉仕をただけの日本人を感謝と喜びの心で今なお覚えている老女。私はこの人々の中に自分自身を見ているのかもしれませんが、CRHPの人々や働きをとおして、彼らと同じように私も変えられました。それは私にとって、本当に素晴らしい経験なのです。

神様は不思議な方法で働かれます。種を蒔き、そしてそれがどのように育つかわからなくても、ちゃんと成長させてくださいます。でも私には、わかっています。神様は「愛」と「喜び」を創造なさいましたが、それを人間どうしが分かち合ったり、与えあうときに、何倍にもしてくださるということです。このワークキャンプから私を受け取った愛と喜びの贈り物、キャンプに関



わった人々、日本人ボランティアの人々やスタッフ、またCRHPの働き人たち、そして私をいつも感動で満たしてくれるジャムケッドの美しい人々、これらすべての人々に感謝します。これからも義足ワークキャンプをとおして、この愛と喜びがもっと、もっと大きく育ちますように。そして、神の御国の種が喜びと共に蒔きつけられ、信仰と希望と愛とが、人々の生活にもっともっと広がってゆきますように。



生きること・死ぬことについての聖なるわざ：修養会的ワークショップ

キャロル・サック

JELA「リラ・プレカリア」(祈りのたて琴)
プログラム・コーディネータ

6月1日から3日間、東京・三鷹のルーテル学院大学で、リチャード・グローブズ博士と妻のメアリーさんによるセミナーが開催されました。夫妻は、米国オレゴン州にあるSacred Art of Living Center for Spiritual Formationの共同設立者です。二人のセミナーがアジアで開催されるは、今回が初めての事です。毎日9時半から5時までのきついスケジュールだったにもかかわらず、牧師、カウンセラー、看護師、ホスピス関係者等の専門家が、霊性や終末ケアの問題に関心のある一般人が合計60人以上参加しました。同様のセミナーを東京・恵比寿のジェラ・ミッションセンター(6月4日)と熊本の九州ルーテル学院(6月6日)で開いたあと、夫妻は香港で医師向けワークショップを開くために、6月12日に日本を後にしました。

セミナーでは、肉体的な痛みの診断と同程度に重要な「霊的痛みの理解」に焦点があてられました。それは、「痛み」の根本的な原因がわかれば、それから解放される希望が生まれる、という考えにもとづいた取り組みです。

リチャード博士は、西洋文化における死や死ぬことに関する歴史的研究について、また、中世におけるホスピス運動の歴史について、そして、このホスピス運動が1967年にイギリスで、医学博士のCicely Saunders夫人によってふたたび脚光を浴びはじめたことについて、自らの研究を紹介しました。ケルト人、コプト人、ユダヤ人、アメリカ先住民の伝統も引用し

以下の要領で、来年の参加者を募集します。

日程: 2007年2月18日～26日(多少、前後する可能性があります)

場所: インドのマハラシュトラ州ジャムケッド(JELAが支援している地域)

内容: 毎日の奉仕と聖書の学びを通して、クリスチャンとしての信仰を堅固にする。現地の子どもたちと遊んだり、足をなくした人のための義足作りを助ける。キリストの愛に裏打ちされた現地の多様な働きを、自分の目で見る。

募集人数: 18歳以上の男女十数名(クリスチャンでなくても参加できます。書類選考有)

第3回インド・ワークキャンプ参加者募集!

参加費: 12万円(ただし、パスポート、旅行保険、予防接種は個人負担です)

申込方法: JELA事務局にお問い合わせください。
電話03-3447-1521、
ファックス03-3447-1523
メールjela@jela.or.jp

締切: 2006年12月10日(日)

その他: キャンプの目的や持ち物等に関する詳しい説明会を、出発前に開きます。

● インド以外にもブラジル、バングラデシュ等に随時ボランティアを派遣しています。興味のある方は、お気軽にJELA事務局までお問い合わせください。

ながら彼は、多くの非西洋社会の伝統において重要とされた役割は「死後の世界への助産婦」というべきもので、それは"anamcara"とか「魂の友だち」という名で呼ばれ、人が安らかに死ぬことを助ける仕事だと説明しました。



写真: 儀式を執り行いながら説明をするリチャード博士とメアリー夫人

メアリーさんは、悲しみにうちひしがれている人を慰める、ホスピスのカウンセラーとしての経験が豊富な方です。セミナーの各セッションの始めと終わりに、さまざまな宗教や文化的伝統を取り入れた、いのちを保つための儀式が紹介されましたが、彼女はこれらをわかりやすく有意義な形で見せてくれました。儀式の紹介にあたっては、図版や工芸品、音楽、なんらかのプレゼンテーション、古代の造形物、ビデオ等が駆使され、多様で意義深い学びの機会が提供されました。セミナー参加者は、いのちの末期の意味について黙想することは、生きつつあるいのちを霊的に深くとらえ、それを豊かなものにできるという理解に導かれました。「有意義な死」についての学びは「有意義な生」のあり方に気づかせてくれるのです。

夫妻が日本を離れるために成田空港に向かっているとき、まったく突然に、聖路加国際病院理事長の日野原重明先生との面談が実現しました。日野原先生は、ホスピスケアを含めた、医療における霊性の重要性を理解し、その日本での啓蒙活動に取り組んでいらっしゃる、この分野の第一人者です。面談の中でグローブズ夫妻は、自分たちが

2006年8月から始める"Anamcara Project" (<http://www.sacredartofliving.org/>)にふれ、ホスピスケアの医療的・霊的分野で世界的に著名な人々の教えを受けるために、世界中から約200名の人々がこのプロジェクトに参集する予定であると紹介しました。日本からは、JELAのリラ・プレカリア「祈りのたて琴」プログラムの関係者4人を含めた、5人が参加予定です。

お二人は今回の来日でたいへん勇気づけられたようです。行く先々で人々の温かさと素晴らしいもてなしを受けました。日本ではホスピスがまだあまり普及していないので、死にゆく人によりそい、霊と肉体の両面でケアをほどこす、つまり、人々の魂とからだの両面における根源的な必要に手を差し伸べる、"anamcara"のような考え方を普及させるのに、いまが絶好の機会だと二人は考えています。ホスピスが医療的・肉体治療的な分野で確固たるシステムを構築してしまえば、夫妻が重視していることが見落とされる可能性があるかと危惧しています。人間一人ひとりの総合的側面、つまり、苦しんでいるのが誰であり、いかなる「ひと」であるかということが最も重要なことだというのが二人の立場です。「肉体」には二義的な意味しかないのです。彼らは、自分たちの提唱するこの考えが、早く日本に根をおろすように願っています。



写真: 日野原先生と歓談するグローブズ夫妻

奨学金制度

JELAの奨学金制度は、国際親善と平和、文化、学問の向上に寄与できる人材(年間数名)に対して、学費その他を提供する制度です。これまで、日本で農業研修を受けるアジアの人々やブラジルで神学修得を目指している方などに提供してきました。日本で難民として認定されながら、制度上の不備や家庭の経済的な問題から勉学の道を閉ざされている方が多数存在するようです。今後はこのような方々にも積極的にJELA奨学金の門戸を開放するつもりです。今回はこのような受給者の一人、エイミーさんの便りを以下に紹介します。お読みになり、彼女を個人的に支えたいと思われた方は、献金指定欄に「クー・エイミーさんへ」とご記入くだされば、直接ご本人にお渡しします。

大学で勉強できるしあわせ



クー・エイミー

みなさん、こんにちは！ クー・エイミーと申します。私は現在、JELAから奨学金をもらっている学生の一人です。今年の4月から日本大学商学部に進学しました。今の私がここにいるのは長年苦勞をして私達の生活を支えてきた両親、いろいろな面で応援をしてくれた方々、経済面と精神面の両面で支援してくれているJELAの皆様、そしてJELAを支援してくれている皆様のおかげです。

私は父母と一緒に14年前、日本に来ました。ミャンマーの政治問題が原因です。父はNational League for Democracy (Liberated Area) Japan Branchという団体に所属しており、民主主義を求める政治運動を行ったゆえに、私達家族はミャンマーに帰ると身に危険が及ぶ状況に陥ったのです。ミャンマーは現在も軍事政権の国です。私達家族は国に帰ることができないので日本で難民認定を受けました。すぐに難民と認定されたわけではありません。認定がおきるまでおよそ7年、不法滞在者として日本に住んでいました。

日本はまだ外国人に対して冷たい国だと思

います。その社会で私の両親はパートの仕事をしてながら私をインターナショナルスクールに通わせてくれました。小学校にあがる当初、難民認定されていなかったの、私は日本の学校に通うことができませんでした。だから普通の小学校より学費の高いインターナショナルスクールしか選択できなかったのです。そして両親は私を高校2年生までインターナショナルスクールに通わせてくれました。



写真:クーさん一家(左は高校の教師)

私は高校を2年までしか行っていません。なぜかという私の学費が両親に負担をかけすぎていたのと(家には私の学費に使われたお金が借金として残っています)、2年の終わりに高卒認定試験を受けると3年に進まなくても大学に進学できるとわかったからです。このまま就職をしても良かったのですが、そうすると私はミャンマー人であり、インターナショナルスクールの高校中退になります。それではいくら英語を話せたとしても良い所に就職をするなんてできません。それでは今まで私の教育のために努力をしてきた両親の苦勞が無意味になってしまうと考え、大学への進学を決意しました。そして高校をやめてから高卒認定試験の勉強をし、合格することができました。その後は大学受験まで時間がわずかしかなかったのですが、大学も無事合格しました。しかし、大学には受かったものの、両親はパートで生活をたてているので私を大学に行かせるお金がありませんでした。そんな状況の中、手を差し伸べてくれたのがJELAの皆様です。JELAが全面的に学費のサポートをしてくれたおかげで、大学に進学することができました。

いま大学で会計の勉強をしながら、アルバイト、サークル活動、そして部活と忙しい毎日を過ごしています。将来、会計士になりたいので、大学では主に会計学を勉強しています。経済学、経営学、そして商学といった会計に関わる新しい知識を得る日々が続いています。いま集中的に勉強しているのは日商簿記3級の勉強です。インターナショナルスクールで授かった語学力にも磨きをかけたいと考えています。アルバイトは週4回、コンビニで働いています。両親に負担をかけないためにも、少しでも自分でお金を稼がないといけないからです。学校では「赤十字奉仕団」というボランティアサークルと部活の軟式テニスを楽しんでいます。赤十字奉仕団では多摩川沿いのゴミ拾いや手話の講習会、そして月に2～3度、障害者の方々との交流をしています。部活は週3回の練習があり、もうすぐ夏の試合にむけて強化練習が始まります。毎日が忙しいですが、ものすごく充実しています。

大学に通えることが本当に嬉しく、それを支えてくださる方々にとても感謝しています。4年間一生懸命勉強して、日本と母国ミャンマーのために役立つ仕事が出来ればと思っています。

●エイミーさんのほかに、現在二人のアジア出身の方がJELAの奨学金を得ながら、栃木県のアジア学院で農業研修を受けています。一人は、来日直前までLWF(世界ルーテル連盟)カンボジアで勤務していたヴェスナ・オウクさん、もう一人はインドネシアのルーテル教会の牧師、オステン・マトンダングさんです。二人の研修が有意義なものになるように、お祈りください。



*JELA奨学金制度の詳細についてはJELAに直接お問い合わせくださるか、www.jela.or.jpの「奨学金制度」欄をご覧ください。なお、このホームページは近い将来、全面改訂の予定であり、掲載情報(住所・電話番号など)が古いままのページがありますので、ご注意ください。JELAの最新の連絡先は、このニュースレターの表紙上部でご確認ください。

リラ・プレカリア(祈りの豎琴) 研修講座が始まりました

むさしの教会・中山康子

4月から始まった講座は、8名の受講生を中心に毎週木曜の授業とルーテル学院大学のカウンセリング講座の受講を合わせて進められています。受講生は、千葉県鴨川から、福島県のいわき市からと遠方から通う人、年齢幅も、寄って立つ信仰の幅もありますが、ひとつのファミリーのように和気藹々と研鑽に励んでいます。十数台のハーブが並ぶジェラ・ミッションセンターに国内外から迎えた特別講師からは、詩編研究、ハーブによる音楽療法、音楽療法と情緒的効能、尊厳ある生き方一死への道のり等のテーマで講義を伺いました。公開講座には、どなたでも参加できます。受講生はこの他にも日々3時間の独習を練習記録に採る自主訓練を課せられています。祈りと音楽を届ける“宅配便を18ヶ月後には皆様にご用意できるようにスタッフ一同も精励努力しています。

(9月以降の公開講座についてのお問い合わせはJELA事務局まで。)

難民支援

諸外国における難民支援

財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部
大原 晋



○各国の難民受け入れと支援の主な特徴

難民事業本部では、平成14年度～15年度に欧州諸国を、さらに平成16年度～17年度には、北米2カ国、北欧5カ国、大洋州2カ国およびオランダの難民受け入れ状況調査を、JELAをはじめとしたNGOの方々の参加も得て行いました。

調査国の多くにおいて、難民受け入れには二通りの方法があります。一つは、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の第三国定住プログラムなどに基づく受け入れで、海外の難民キャンプなどに滞留している難民を計画的に毎年一定数受け入れる方法です。もう一つは、庇護申請手続きを通じた受け入れ(認定難民の受け入れ)で、また、これを補完する形で「難民の地位に関する条約(難民条約)」上の難民とは認められないものの、人道的な観点に基づき在留許可を付与することによる受け入れ方法もあります。

調査国では、難民に対して1年以上の期間、1人1人のニーズにあった語学教育、職業訓練などを中心とした定住支援プログラムを行っています。語学ができれば就職できないというのは日本と同様で、各国とも特に語学教育には力を注いでいます。語学教育では、日常的に使用する言葉の教育はもちろんのこと、パソコンを使えなければ就職には結びつかないとの考えから、パソコンを使用し、職場で使える職業語学教育コースが設置されています。これらの定住プログラムは、難民だけを対象としたものではなく、移民や人道的配慮による在留許可者に対しても同様に行われており、早期定着、自立および国への貢献を目指しています。

また、特に欧州諸国では、庇護申請者専用の施設を設置し、同施設内または同施設周辺において語学教育などの支援を行っています。庇護申請者は、国に定住することが認めら

れたわけではなく、これらの人に対して支援することへの世論の批判もあります。しかし、人道的理由、庇護申請者が無為に時間を過ごすことを避ける、認定後の早期定着につながるなどのプラス面を考慮して支援を行っています。



写真:ポルトガルの庇護申請者受入施設を視察する筆者(右)とJELAの森川職員

○最近の動向

調査国では、一般的に難民受け入れ政策は移民受け入れ政策の一環としてとらえられており、難民の受け入れは国内外の社会情勢や経済状況などによっても左右されてきました。近年では、難民を含む外国人の増加が社会負担となってきたことや、2001年9月11日に米国において発生した同時多発テロ事件以降に見られるイスラム教徒に対する不信感などによる国内世論を反映し、移民・難民の受け入れを縮小する政策を打ち出している国も見られます。しかし、一般的には、悲惨な状態にある人たちに援助の手を差し伸べるということに対して、一般市民のコンセンサスは得られているように思われ、各国とも、国際社会における人道援助の責任を積極的に担うという政策の下、難民を受け入れています。支援については、難民が定住する地域の地方自治体および地域住民が難民の受け入れの主体となり、政府、地方自治体、支援団体および地域住民が一体となって、国の発展のためにも難民を支えています。このような諸外国における経験は、日本においても参考となる点が数多くあると思われます。難民事業本部の諸外国における受け入れ状況調査の報告書は、難民事業本部のホームページ(<http://www.rhq.gr.jp>)でご覧になれますので、ご一読ください。



講演会「世界の難民・日本の難民—— 各国の難民支援活動の実態とその日本 への示唆」

本欄の執筆者・大原晋氏が、記事に書ききれなかったことや、記事を補足する内容を、スライドを見せながらわかりやすく解説します。質疑応答の時間もあります。世界の難民支援活動の実態を知ることとおして、日本の難民支援活動の課題や改善の手がかりについて学ぶよい機会です。ご来場をこころよりお待ちしております。

○講演者自己紹介

元々はアナウンサー志望であったが「笑顔が悪い」との評価を受け、大学院で難民問題に関する研究を始めることを決意し十数年がたつ。大阪大学大学院国際公共研究科博士後期課程満期退学。これまで研究者として、またNGO職員として難民支援に携わり、2001年より難民事業本部にて海外調査などの業務を担当する。難民の状況調査などで訪問した国は約50カ国。趣味は街散策。著書に「世界の難民・日本の難民:官の目、民の目、学者の目」「地球が舞台 国際NGO再前線からの活動報告」(劉草書房)などがある。

○日 時 9月22日(金)

午後6時30分～7時50分(6時開場)

○会 場

ジェラ・ミッションセンター1階ホール
東京都渋谷区恵比寿1-20-26
(JR山手線・恵比寿駅東口から徒歩数分)

○参加費無料

○主 催

特定非営利活動法人 レフュジー カウンシル
ジャパン(RCJ)
2004年に設立された、日本にきた難民を支援する民間NGOの合議体。JELAも加入しています。

○申し込み

会場設定・資料準備の都合上、参加を希望される方は、「世界の難民・日本の難民」参加希望と記入の上、氏名・所属・連絡先(電話番号、Fax番号、emailアドレスのいずれか)を併記し、9月15日までに下記までお申し込みください。

ファックス:03-3760-3474

メール:rcjevent2006@gmail.com



ジェラ・ミッションセンター(東京・恵比寿)では、秋から冬にかけて次のような催しを計画しています。近づきましたら改めてご案内いたしますので、楽しみにお待ちください。

中国人クリスチャン芸術家の版画展とピアノ・コンサート

最近「るうてる」福音版の紙面に彩をそえている、中国人クリスチャン・アーティストHeQuiさんの版画展を10月中旬ごろ開催します。会場で販売もいたします。展示会初日には、シーグフリード・テッパーさんによるピアノ・コンサートも開催予定です。写真下・右:ヘキさんの作品



ワインパーティとキルト展示会

昨年好評だった「ワインとチーズのパーティ」(チーズ以外の食べ物も出ます)を、今年も11月下旬か12月上旬に開催します。いまから、オークションの提供品をお考えください。同時期にキルトの展示会も開催します。米国から作品が送られてきつつあります。キルトは会場で即売し、収益はアジアの子どもたちに捧げます。

お知らせ

●JELA役員の紹介

3月31日の総会で次の方々が役員に選出されました。任期は2年です。

理事:中川浩之(理事長)、ローウェル・グリテベック(常任理事・事務局長)、長尾博吉(常任理事)、ナタン・ポーマン、芳賀明子、川上範夫、浅野直樹、石原寛、マフロン・ベケダム

監事:関口昌弘、松岡俊一郎、森下博司 順不同

●ごあいさつ

日本福音ルーテル社団理事長 中川浩之



これまで永年にわたって日本福音ルーテル社団の理事長としてご奉仕下さいましたベケダム先生の後任として、今期よりその務めを引き継ぐことになりました。これまでの先生のお働きに心より感謝申し上げます。

長い社団の歴史の中で、今が一番大きな変化の時代にあるといっても過言ではないでしょう。古くは社団と言えば宣教師会と同一と思われていた時代もありましたが、現在では社団法人として公益法人本来の活動が活発に行なわれ、日本福音ルーテル教会とも共同事業を通して密接な協力関係が築かれています。

いま世界には混沌とした国際関係や経済成

長の影で、人間としての尊厳を奪われようとしている人たちがたくさんいることを忘れてはなりません。これから「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」との主の言葉に従って、この人たちのために微力ながら尽くして行きたいと思っています。

アメリカ福音ルーテル教会の世界宣教に関する方針の転換や政府の公益法人制度改革など内外の環境変化に対応して、これから私たちも変化を遂げていかねばなりません。また多くの方に正会員、賛助会員になっていただき、バランスのとれた財務内容に変えていくことも課題です。

皆様方のいっそうのご支援とご協力をお願い申し上げます。

●JELAの活動を支える職員たち

左より、森川博己、鳴海亮、ローウェル・グリテベック(事務局長)、古川文江、星崎ポール



<各プログラム支援献金>

浅香冠菜・光/天羽健/石丸明弘/井垣美知子/泉洋子/市ヶ谷教会/市原周子/井上渥子/伊原敬子/今村美美子/岩本保子/ヴァンデルタング・エリ子/上原文子/植松美江/内海初子/江澤妙子/大垣教会/大塚真佐子/大中真理/小川晶人/乙守ミチ子/柿沢純江/兼岩恵美子/蒲田ルーテル幼稚園保護者会/河野久美子/北岡佐起子/岐阜教会/京谷信代/清田純次/釧路教会/倉重ミドリ/黒野正信/古財悦子/佐藤美登里/芝田美穂子/周田裕芳/白鷺市十郎/尻無浜紀美子/鈴木やす/関口佳子/高田敏尚/高橋進/竹内貞夫/玉名教会/堤重敏/鳥居和代/西村紀子/仁保成子/野田マサ子/野中聖子/芳賀明子/平林洋子/福田光利/藤橋日出子/古川文江/益永和代/南谷なほみ/宮崎カリタス修道会総本部修道院/ムロイトモコ/毛利庄蔵/森保宏/森田雅子/八坂由貴子/安田孝三/山県順子/山口美子/若原奇美子/渡辺映子・渡辺高伸/Augustana Lutheran Church WELCA/Calvary by the Sea Lutheran Church/Kenneth Mok/South Carolina Synod/ 他匿名数名

<賛助会費>

赤間峰子/浅香冠菜・光/飯野タケ/石田浩子/伊藤勲/井上渥子/今村美美子/岩間雪子/岩本保子/ヴァンデルタング・エリ子/大谷忠雄・妙子/小川晶人/乙守ミチ子/上窪松子/窪田春枝/糸井登志恵/小坂敦子/児島和子/斉藤忠碩/佐々木裕子/芝田美穂子/島宗正見/高田敏尚/高橋寿子/高橋佳子/滝崎賢二/竹森洋子/仲吉智子/西山昭子/西平薫/橋口保夫/早瀬康平/福田陽子/宝珠山幸郎/増島俊之/山本一男/山本了/Albrecht, Oscar/Albrecht Lynette/Nelson Craig/Nelson, David/Nelson Irene 他匿名数名

以上、敬称略。ご協力ありがとうございました。

匿名をご希望の場合は、支援金をお送りくださるさいにお申し出下さい。

編集後記

「……孔子の生命感を伝えるこんなエピソードがある。酷使され、息絶え絶えの馬を目にした孔子が、弟子に『あの馬を買い取り、救いなさい』と命じる。弟子は『この国には何十万もの馬がいます。なぜあの馬だけ助けるのですか』と聞く。孔子は答えた。『この馬が私の目の前にいるからだ』……」(加藤周一著『常識と非常識』、かもがわ出版、2003年) 距離の遠近にかかわらず、自分の「目の前」にいる、助けが必要な人々。その存在に敏感になり、必要と感じた行動を即座にとれる、そんな人間であり、組織でありたいです。お読みになった記事から、その思いを感じとっていただけるなら幸いです。(M)

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association
日本福音ルーテル社団
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
Tel. 03-3447-1521 Fax. 03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp
日曜番号 00140-0-009206 加入者名 日本福音ルーテル社団